

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.241

2013年6月

名誉教授称号授与式・懇談会を開催



目次

●ニュース	
名誉教授称号授与式・懇談会を開催	3
平成25年春の叙勲・褒章受章者決まる	4
グランドピアノ開鍵式を開催	4
●知の未来へ	
肺腺がんのアキレス腱の同定	5
山口 知也（大学院医学系研究科助教）	
●知の先端	
日米関係における中国要因と日米経済界	6
井口 治夫（大学院環境学研究科教授）	
●部局ニュース	
第1回 ITbM 国際シンポジウムを開催	8
「基礎環境学を担う若手人材育成プログラム」派遣報告会を開催	9
ICCAE 2013年度第1回オープンセミナーを開催	9
エネルギー防災寄附研究部門活動報告会を開催	10
ライフライン地盤防災寄附研究部門活動報告会を開催	10
第89回防災アカデミーを開催	11
大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会を開催	11
展示会「不思議!? 解剖図」を開催	12
第50回博物館コンサートを開催	12
「地質の日」特別講演会を開催	13
ワークショップ「くじらのひげで靴べらを作ろう」を開催	13
ミクロの探検隊を開催	14
野外観察園春の見学会を開催	14
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年4月16日～5月15日	15
●INFORMATION	
平成25年度名古屋大学公開講座	18
●イベントカレンダー	20
●ちょっと名大史	
学部の誕生と草創期⑦ ― 工学部 ―	24

名誉教授称号授与式・懇談会を開催





2
1
1 辞令書授与の様子
2 記念撮影

名誉教授称号授与式が、5月10日(金)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

名誉教授の称号は、本学教授として7年以上勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった方等に授与するもので、今回新たに39名(新制計1,148名)の先生方に授与されました。

授与式では、今回出席された26名の新名誉教授に、濱口総長から辞令書が

授与され、永年にわたり本学の教育・研究の発展に多大なる貢献をされたことへのお礼と、お祝いのご挨拶が述べられました。続いて、新名誉教授を代表し山本進一先生からお礼のあいさつがありました。

その後、シンポジオンホールにおいて、名誉教授懇談会が約120名の参加を得て開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋からの

叙勲等受章者、役員・部局長の紹介に続いて、総長からあいさつとこの1年の本学の動き等について報告がありました。その後、現名誉教授を代表して塩澤君夫先生からスピーチがあり、平野眞一前総長の発声で乾杯が行われ、参加者は、終始和やかな雰囲気の中で懇談しました。

今回、新たに名誉教授の称号が授与されたのは、次の方々です。

文学研究科	杉山寛行	医学系研究科	安藤久實	生命農学研究科	柳沼利信
教育発達科学研究科	的場正美	医学系研究科	鈴木和代	生命農学研究科	山本進一
教育発達科学研究科	吉田俊和	医学系研究科	曾我部正博	国際開発研究科	高橋公明
法学研究科	杉浦一孝	医学系研究科	直江知樹	環境学研究科	平原和朗
法学研究科	中舎寛樹	工学研究科	梅村章	環境学研究科	溝口常俊
法学研究科	松浦好治	工学研究科	大久保仁	情報科学研究科	横井茂樹
経済学研究科	岸田民樹	工学研究科	谷口元	総合保健体育科学センター	池上康男
経済学研究科	多和田眞	工学研究科	平出正孝	太陽地球環境研究所附属 ジオスペース研究センター	荻野瀧樹
経済学研究科附属 国際経済政策研究センター	平川均	工学研究科	福田敏男	エコトピア科学研究所	臼倉治郎
理学研究科	大澤幸治	工学研究科	水谷孝	エコトピア科学研究所	北川邦行
理学研究科	楠見明弘	工学研究科	美宅成樹	地球水循環研究センター	中村健治
理学研究科	近藤孝男	工学研究科	山崎耕造	遺伝子実験施設	石浦正寛
理学研究科	野崎一洋	生命農学研究科	三宅博	物質科学国際研究センター	巽和行

(授与番号順、敬称略)

平成25年春の叙勲・褒章受章者決まる

－本学関係者3名が喜びの受章－

平成25年春の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々が受章されました。

瑞宝章は、国家又は公共に対し功労のある方のうち、公務等に長年にわたり従事し、成績を挙げた方に授与されます。

紫綬褒章は、学術、芸術上の発明、改良、創作に関して事績の著しい方に授与されます。

【叙勲】

[教育研究功労 関係]

瑞宝中綬章

星野 洸 名誉教授（医学部）

瑞宝中綬章

杉山 達夫 名誉教授（農学部）
元理化学研究所植物科学研究
センター長
元中部大学生命健康科学研究所長

【褒章】

紫綬褒章

河本 邦仁 大学院工学研究科教授

グランドピアノ開鍵式を開催

グランドピアノ開鍵式が、4月19日（金）、豊田講堂において開催されました。これは豊田講堂に新しくコンサート用グランドピアノが設置されたことを記念し、本学学生や教職員、その他関係者等を対象として行われたものです。

初めに濱口総長より開式のあいさつがあり、続いて本学工学部の卒業生である伊藤公保ヤマハ株式会社ピアノ

事業部事業部長より、「ピアノづくりにおけるエンジニアリング」と題し、長年ピアノ製造に携わってきた視点から、ピアノの歴史や構造について講演がありました。また、今回のピアノの設置が、本学卒業生の寄附により実現したことから、本学への支援の受け皿である名古屋大学基金について國枝理事より説明があり、次いで基金より奨学金を受けている工学部自動車工学プログラム2年のタン・シ・リアンさん、法学部国際社会科学プログラム2年ヤクボワ・ディラフルズさんの2名の留学生から、日本での生活や将来の夢について、日本語でのスピーチがありました。

最後に、国内外で幅広く活躍しているピアニストのイリーナ・メジャーエワ氏によるピアノリサイタルが行われ、ショパンの「幻想即興曲」や「舟歌」、ラヴェルの「ソナチネ」、ドビュッシーの「喜びの島」など全10曲が演奏されました。1時間のリサイタルの間には、イリーナ氏と伊藤事業部長による曲紹介のトークセッションもあり、来場者は曲への理解を深めながら音楽を楽しみました。

会場には約620名が来場し、本学の文化的、芸術的な面を感じさせる記念すべき式典となりました。



講演する伊藤事業部長

肺腺がんのアキレス腱の同定

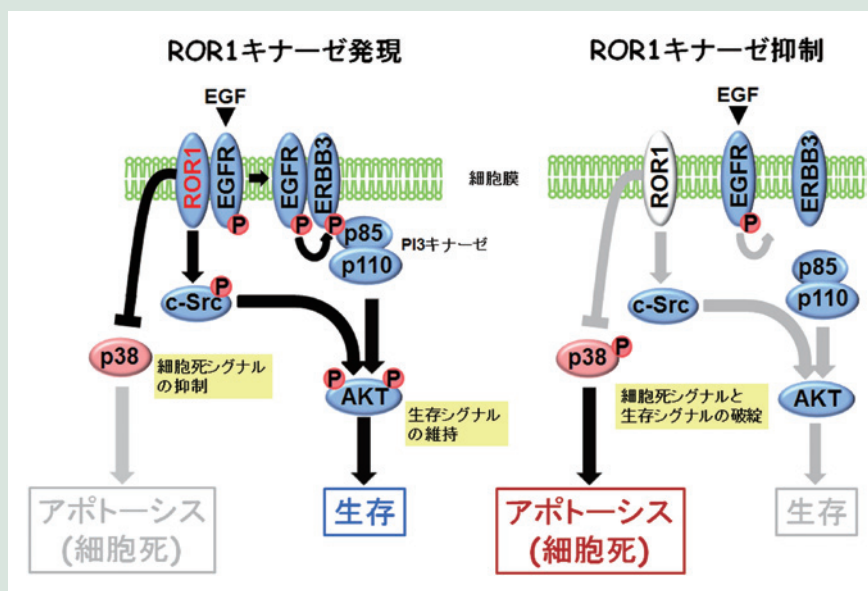
山口 知也
大学院医学系研究科助教

に抑制できることが判明しました。すなわち、肺腺がん細胞におけるがんの増殖や増悪過程において、車でいうアクセルの働きをするがん遺伝子のTTF-1は、実はROR1というエンジンを通じて、がん細胞の死命を決めていることを示しています。また興味深いことに、ROR1遺伝子は、肺腺がんの発生や悪性化に極めて重要な役割を持つ上皮成長因子受容体であるEGFRのシグナルの維持に必要なことも明らかになりました。そして、EGFR遺伝子を標的とする分子標的薬（ゲフィチニブ、商品名：イレッサ）に対して様々な理由で耐性を獲得した（効かなくなった）がん細胞の増殖も、ROR1遺伝子の抑制によって抑えられることが分かりました。

ROR1遺伝子はがん細胞の表面に発現している受容体型チロシンキナーゼであることから、分子標的薬の開発に非常に適した分子であり、今回の私たちの研究はROR1遺伝子の機能を阻害する分子標的薬の開発につながるものと考えています。肺腺がんは極めて予後の悪い肺がんの一種であり、多くの患者さんが苦しんでいます。現在、私たちは臨床応用の観点からも、ROR1遺伝子を分子標的とした肺腺がんの革新的な治療法の実現に向けて研究を進めています。

肺がんは、我が国におけるがん死亡原因の第一位であり、一年間に六万人以上が亡くなっています。なかでも肺腺がんは、喫煙とは非常に弱い関連性を示す末梢肺から発生する肺がんですが、日本を始めとする先進諸国で増加傾向にあり、今や優にその過半を占めています。私達は、2007年にTTF-1という遺伝子が肺腺がんに特異的ながん遺伝子であることを発見しました。その後、米国の3つの研究グループからも相次いで同様の知見が報告され、肺腺がんにとって非常に重要ながん遺伝子であると考えられています。ところが、TTF-1遺伝子がどのようにして肺腺がんの死命を握っているのかは永く不明なままでした。TTF-1自身はがん細胞のみならず、正常な肺の機能維持にも必要なために、治療標的とすることができません。したがって、がん細胞の生存のためにTTF-1遺伝子の手先となって働いている分子の同定が、新たな治療法を開発を進める上で喫緊の課題となっていました。

今回、私達はROR1と呼ばれる受容体型チロシンキナーゼ遺伝子の発現がTTF-1遺伝子によって直接誘導されて、肺腺がん細胞の生存シグナルの維持と細胞死シグナルの抑制を担っていることを明らかにしました。さらに、ROR1遺伝子を抑制することによって、肺腺がん細胞の増殖を顕著



受容体型チロシンキナーゼであるROR1は、キナーゼ活性依存的にc-Srcと細胞内で直接結合しリン酸化して、PI3K-AKT軸による生存シグナルを支える。また、ROR1はキナーゼ活性非依存的にEGFRと細胞外で結合することで、EGFRとERBB3とのヘテロダイマー形成や、それに引き続くERBB3のリン酸化反応、PI3Kの活性化に関わっている。一方、ROR1はこのように少なくとも二つの経路を介してPI3K/AKT生存シグナルを維持すると同時に、p38MAPKを介したアポトーシスシグナルを負に調節しており、両者のバランスを癌細胞にとって有利に保つ働きを担っていると考えられる。ROR1の発現抑制は、このような両者のシグナルのバランスの破綻を引き起こすことから、分子標的としての有用性が考えられる。

日米関係における中国要因と日米経済界

井口 治夫 大学院環境学研究科教授

名古屋大学名誉教授川田稔氏が指摘されていますが、浜口雄幸内閣は、国際協調に基づく経済相互依存のなかで国内の構造改革を進めていき、高度な産業を日本に根付かせていくことを狙いました。これは、世界大恐慌の時期と重なる不幸なタイミングでしたが、この浜口構想の担い手として鮎川義介率いる日産をはじめとする新興財閥が台頭してきました。満洲事変以降、日本は、浜口構想から日本陸軍の永田鉄山が推進した自給自足的な高度国防国家を目指す構想へシフトして行きました。日本の重化学工業は、こうしたなかで発展していき、重化学工業関係の企業をその傘下に多く持つ日産財閥も戦争経済による恩恵を受けました。しかし、拙著で論じたように、鮎川が推進した戦前の日米経済提携構想は、永田構想を下敷きにして石原莞爾の構想に乗りながら、浜口構想へ修正させて行こうとしました

満洲における鮎川の活動は、当時から星野直樹、東条英機、岸信介、松岡洋右、鮎川をニキサンス

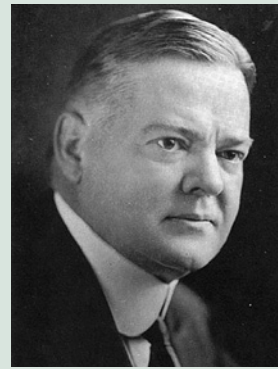


1944年夏、太平洋艦隊司令官ウィリアム・ハルシー（左）と握手する元ディロン・リード投資銀行社長フォレストル海軍長官
Photo 80-G-K 14217, Official Navy Photography, National Archives

ケと、この5人が一枚岩であるかのように形容する傾向が存在していました。拙著で考察しましたように、星野と岸は世界観をかなり共有するところがありましたが、彼らと残りの3人は、それぞれ違った思惑あるいは世界観で『満州国』に関わっていました。

拙著を書いたさい痛感したことは、戦前と戦後について共通することですが、過度に国産主義にならないで外資との提携を推進しようとしたことの現代的意義です。それから日米開戦前についていうと、鮎川が支持した来栖三郎の最後まで粘り強い外交の必要性。それから臥薪嘗胆の大切さです。

鮎川の戦前の日米経済提携構想は、フォード自動車と日産自動車の提携交渉、日本の自動車産業における主導権、そして、朝鮮半島最大級の金鉱脈の利権を所有していた、フーヴァー元大統領の人脈に関係する米国資本との交渉というスケールの大きな内容を伴いました。また、米国大手投資銀行ディロン・リード社幹部と鮎川人脈の関係は、鮎川人脈が戦前・戦後米国の有力者たちに接触して築いた人的ネットワークの代表例でした。



高碓達之助が師事した
ハーバート・C・フーヴァー
(1928年)
Herbert Hoover Presidential
Library and Museum



1947年9月17日に行われたジェームズ・フォレストル初代国防長官の就任式
中央の右の人物（右手を挙げている）が、1944年5月から就任式まで海軍長官を務めていたフォレストル。

Accession number: 97-1766, Harry S. Truman Library



1947年10月29日 ケネス・ロイヤル陸軍長官と陸軍省幹部たち
前列右がウィリアム・ドレーパー陸軍次官、前列中央がロイヤル陸軍長官、前列左がドワイト・アイゼンハワー陸軍参謀総長（のちの米国大統領）

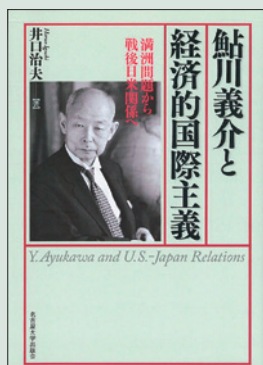
Accession number: 2009-1263, Harry S. Truman Library

そして、ハーバート・C・フーヴァー元大統領を中心とする人脈と鮎川人脈との関係は、日本の外交と日本の経済界が共和党系人脈とのパイプが太い好事例でした。鮎川がなぜ高碇達之助を彼が総裁を務めていた満洲重工業に関与させるようにしたのかと言うと、高碇とフーヴァーの親交が最大の理由であったと言えます。

戦後日本の経済復興が、重化学工業の発展を伴いながら可能となっていった最も重要な初期条件は、米ソ対立が深刻化していった1946年から1948年の時期に、米国のアジア・太平洋地域における安全保障戦略の要となるはずであった中国の国民党政権が、中国共産党との内戦で混乱・弱体化していったことでした。このため米国が日本重視に回帰していったのです。このような日本重視と日

本の重化学工業容認の政策潮流を米国の外交・安全保障政策で形成していったのが、日本経済と日本の経済界の有用性を認識していたフーヴァー元大統領のほか、ドレーパー陸軍次官やフォレストル初代国防長官のようなディロン・リード投資銀行元幹部でした。

戦前の日本は、日中戦争の泥沼化と枢軸同盟締結により亡国の道を歩み、戦後の日本は、中国の混乱と日米関係緊密化のなかで経済大国化が可能となりました。現在の日本は、歴史に学びながら日米緊密化を軸に、経済・軍事大国中国とのバランスのとれた関係が求められています。



『鮎川義介と経済的国際主義：満洲問題から戦後日米関係へ』、井口治夫、名古屋大学出版会、全458頁、2012年2月刊行
2012年第34回「サントリー学芸賞」（政治・経済部門）受賞作品

1995年 シカゴ大学大学院社会科学研究所歴史学専攻博士課程修了（Ph.D. 取得）後、同年 ハーバード大学ライシャワー日本研究所ポスト・ドクトラル・フェロー。1996年 同志社大学アメリカ研究所（同大学院アメリカ研究科併任）専任講師。1999年 同大学アメリカ研究所（同大学院アメリカ研究科併任）助教授。2002年 名古屋大学大学院環境学研究所助教授。2008年 同大学同大学院教授。現在に至る。

いぐち はるお



ひとこと：国際政治経済を歴史学的あるいは政治学的に検証するさい、広い視野と本質的な観点から考察を行うことを心掛けたく思います。

第1回 ITbM 国際シンポジウムを開催

●トランスフォーマティブ生命分子研究所

トランスフォーマティブ生命分子研究所 (ITbM) は、4月18日(木)、19日(金)の両日、野依記念学術交流館において、第1回 ITbM 国際シンポジウムを開催しました。これは、昨年10月に文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム (WPI)」に採択されたことに伴う同研究所の創設を記念して開催されたものです。

ITbM は、世界屈指の分子合成力を推進力として、生命科学・技術を根底から変える「トランスフォーマティブ生命分子」を生み出すことを命題としており、合成化学者と動植物分子生物学者の連携を核として、動植物の生産性や生体機能を精密に制御する分子及び画期的なバイオイメージングを実現する分子の開発を行います。また、これらの実現に不可欠な超効率的な合成や分子活性化を可能にする触媒の開発を行い、究極的には食糧の安定供給など地球規模の問題解決に貢献することを目指しています。

開会に伴い、主催者側から濱口総長、伊丹同研究所長があいさつを行った後、井村裕夫先端医療振興財団理事長 (WPI プログラム委員長)、吉田大輔文部科学省研究振



全体集合写真

興局長 (安藤慶明文部科学省研究振興局基礎研究振興課長代読)、黒木登志夫日本学術振興会学術システム研究センター相談役 (WPI プログラムディレクター) より祝辞とあいさつがありました。

引き続き行われた公開討論会では、篠崎一雄理化学研究所環境資源科学研究センター長、ヒュー・デイヴィスエモリー大学教授、ジョセフ・タカハシ テキサス大学サウスウエスタン医学センター教授、チャン・タイ ウィスコンシン大学教授、宮脇敦史理化学研究所脳科学総合研究センター副センター長、菅 裕明東京大学大学院理学系研究科教授、林 謙一郎岡山理科大学理学部教授、福山 透創薬科学研究科特任教授による招待講演が行われ、ITbM からは、伊丹同研究所長 (有機合成化学・生物活性物質)、東山同副所長 (細胞生物学・バイオイメージング)、山口茂弘同教授 (構造有機化学・分子設計)、吉村 崇同教授 (動物分子生理学、内分泌学)、大井貴史同教授 (有機合成化学、分子認識化学)、木下俊則同教授 (植物分子生理学・シグナル伝達)、ステファン・イレ同教授 (量子化学・分子シミュレーション)、キャサリン・クラッデン クイーンズ大学教授 (有機金属化学・材料化学)、鳥居啓子ワシントン大学教授 (植物発生遺伝学)、ジェフリー・ボーディ スイス連邦工科大学教授 (有機合成化学・ペプチド化学) の10名の主任研究者が講演しました。

国内外から参加した400名余りの研究者は、生物学、化学そして計算化学と多岐にわたる講演に真剣に聞き入り、植物の生長のメカニズムや化学反応の選択性について白熱した議論を展開しました。

会場は科学を追求する熱気に包まれ、創設記念に相応しい活気溢れるシンポジウムとなりました。



総長、ITbM 主任研究者、来賓、講演者等の記念撮影

「基礎環境学を担う若手人材育成プログラム」派遣報告会を開催

●大学院環境学研究科、大学院生命農学研究科

大学院環境学研究科及び大学院生命農学研究科は、4月17日(水)、環境総合館レクチャーホールにおいて、「基礎環境学を担う若手人材育成プログラム」の派遣報告会を開催しました。

同プログラムは、日本学術振興会の「若手研究者海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」に採



報告会の様子

択されて平成21年度から平成24年度にかけて行われたもので、両研究科が中心となって実施しているグローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」と相補的なものです。同プログラムでは、派遣期間2カ月以上の長期派遣として延べ41名(うち博士研究員以上37名、大学院生4名)、2カ月未満の短期派遣として延べ83名の合計124名を海外に派遣しました。

報告会では、プログラム代表者である山口 靖環境学研究科教授の概要報告に引き続き、大学院生による海外協定校でのワークショップや授業への参加報告、大学院生による海外のフィールド調査報告、若手教員による欧米の大学や研究機関での長期滞在報告などが行われました。報告された派遣対象国は、米国、フランス、ドイツ、ニュージーランドといった先進国から、バングラデッシュ、フィリピンなどの発展途上国まで多様でした。

報告者からは、海外派遣が研究のモチベーションを高める契機となったこと、今後の共同研究継続に繋がる人脈形成に役立ったことなどが述べられ、同プログラムが若手の国際化と研究能力向上に大きく貢献したことが実感されました。最後に、プログラム運営委員である竹中千里生命農学研究科教授があいさつを行い、閉会しました。

ICCAE 2013年度第1回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、5月7日(火)、農学部第2講義室において、2013年度第1回オープンセミナーを開催しました。

今回は、ICCAE客員准教授である桂 圭佑京都大学大学院農学研究科附属農場助教を講師として迎え、「多収イネの姿-中国雲南省の超多収事例から見えること-」と題



講演する桂客員准教授

し、世界屈指のイネの超多収地域である中国雲南省涛源村の超多収灌漑稲作の事例紹介と、同地域の超多収が実現されている機構の作物生理学的知見からの解説が行われました。桂助教は、イネやダイズなどの作物を対象に、作物学的アプローチから生産性の向上を目指す研究を展開しています。

雲南省涛源村における超多収の主な要因として、現地で栽培されている両優培九というハイブリッド米の生産性が極めて高いこと、イネの生育にとって重要な日射量が非常に高いこと、肥料を大量に投入していることが挙げられ、それらの作物学的意義が詳しく説明されました。また、これらの3つの要因、すなわち栽培されているイネ品種の能力、現地の栽培環境、栽培管理には相互作用があり、同村と同じ品種及び栽培管理を日本などの異なる栽培環境下で実践しても、必ずしも超多収は実現できないことが示されました。

講演後には、超多収稲作や中国の農業に関心を持つ多数の参加者との間で活発な質疑応答が行われ、盛況なセミナーとなりました。

エネルギー防災寄附研究部門活動報告会を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月19日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、エネルギー防災(中部電力)寄附研究部門の平成24年度活動報告会を開催しました。同センター及び同寄附研究部門の関係者のほか、学生など約70名が出席しました。

初めに、福和減災連携研究センター長からあいさつがあ



報告会の様子

り、次に、宮池克人中部電力株式会社代表取締役副社長より来賓あいさつがありました。

続いて、同寄附研究部門から3件の報告がありました。まず、武村雅之同寄附研究部門教授より、エネルギー防災寄附研究部門のミッションの説明と、近代的な観測機器がなかった時代の地震である歴史地震などの研究成果報告があり、「歴史は唯一無二の指標」であることから、減災・防災のためには歴史地震研究が重要であることが示されました。次に、都築充雄同准教授より、社会連携に関する成果報告があり、自治体や企業との連携だけでなく、この地域の将来を担う若手技術者とも連携するなどの積極的な取り組みについて紹介がありました。

さらに、虎谷健司同助教より、経済被害予測手法の調査結果報告があり、地震後の電力需給ギャップ解消のための取り組みが紹介されました。

最後に、服部邦男中部電力株式会社土木建築部長より報告会に対する講評があり、同寄附研究部門の活動への期待が示されました。

ライフライン地盤防災寄附研究部門活動報告会を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、5月10日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、ライフライン地盤防災(東邦ガス)寄附研究部門の平成24年度活動報告会を開催しました。同センター及び同寄附研究部門の関係者をはじめ約100名が出席しました。

初めに、福和減災連携研究センター長からあいさつがあ



報告会の様子

り、寄附研究部門が大学の中と外をつなぐ役割を担うことへの期待を述べました。次に、同寄附研究部門からの報告として、北野哲司同寄附研究部門教授より寄附研究部門の1年間の活動報告と液化化被害想定の高高度化等の研究について、宮腰淳一同准教授より南海トラフ巨大地震の被害想定における強震動の予測手法と内閣府の予測結果の解釈について、野中俊宏同助教より地盤や地中構造物に対する地震応答解析結果について、紹介がありました。

続いて、欽田泰子神戸大学大学院工学研究科准教授より、ライフライン地盤工学の現状と課題についての基調講演があり、東日本大震災のライフライン被害をふまえて、今後のライフライン防災はどうあるべきかという説明がありました。また、野田減災連携研究センター副センター長より話題提供がありました。

最後に、中村 修東邦ガス株式会社取締役常務執行役員より同センター及び同寄附研究部門への期待を込めたあいさつがあり、鷲谷 威同センター教授より報告会の講評が行われました。

第89回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月24日(水)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第89回防災アカデミーを開催しました。今回は、松本発達心理精神科学教育研究センター長による講演「心の減災入門～備えあれば心は健康～」が行われ、90名の参加がありました。

松本センター長からは、初めに、東日本大震災において



講演する松本センター長

被災地外の子どもがニュース等の映像から受けた心理的影響について事例の紹介があり、災害が心に与える影響の大きさが説明されました。また災害について「自分は大丈夫」「今回は大丈夫」と考えてしまう心理的反応「正常性バイアス」について説明し、災害時に受けるストレスへの心の反応について知っておいたり、普段から災害時の状況をイメージして準備をしたりする「心の備え」が重要であると紹介しました。

会場全体でリラクゼーション法である「10秒呼吸法」の実習を行った後、質疑応答が行われ、教育関係者の参加者を中心に「心の教育」についての活発な意見交換が行われました。

大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会を開催

●総合保健体育科学センター

総合保健体育科学センターは、4月23日(火)、ES 総合館において、大学生のメンタルヘルスに関する日仏学術交流会を開催しました。

同交流会は、内科医であるコリヌ・クララック ストラスブール大学予防医療部門所長と精神科医である同大学医療心理受け入れセンターのステファニー・ヌヴィエール

氏をフランスより迎え、「大学生の自殺対策」というテーマで開催されました。

両氏からは、現代において、フランスの大学生が抱えている心身の不安定な状況に関する具体的なデータや、それに対してストラスブール大学でなされている試みについて説明があり、主催者側からは、日本の大学生の状況についての話題提供がありました。

ストラスブールでも、名古屋市と同じような「命の電話」に相当するシステムが機能し始めているという話や、個人主義の強い傾向のあるフランスにおいて、死にたいという気持ちがあるにもかかわらず治療を拒否している青年に対して治療者が介入することには、いかなる問題があるのかということについて論究されました。

交流会の後半では、現代の社会において自殺対策として何が可能であるのか、あるいは、現代における社会変化と青年とはどのように関係しているかなど、様々な観点でディスカッションが行われました。



記念撮影

展示会「不思議!? 解剖図」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、2月5日(火)から5月10日(金)までの間、第3回展示会「不思議!? 解剖図ーヴェサリウスから奈良坂源一郎までー」を開催しました。同館内にある医学部史料室の所蔵品の中から古医書、絵画等を展示し、解剖図の美しさ、不思議さを示しました。

長く権威とされていたギリシアの医学者ガレノスの学説



展示の様子

の誤りを指摘し、「近代解剖学の父」と呼ばれる16世紀のベルギーの解剖学者ヴェサリウスが著した「人体の構造に関する七つの本（ファブリカ）梗概」の注釈本から、日本における近代医学の発展の契機となった杉田玄白の「解体新書」、華岡青洲の手術図に影響を受けて愛知郡御器所村（現在の名古屋市昭和区）の医師長東宗元によって描かれた「乳癌手術の図」、賀川流産科の基礎を確立した賀川玄迪の「産論翼」、さらに愛知医学校における解剖学等の教育により本学医学部の礎を築いた奈良坂源一郎による戯画の掛軸「踊る骸骨」まで、多彩な展示により解剖図の面白さを紹介しました。

また、関連資料として、江戸時代の経絡人形を初めて展示しました。経絡人形は、経絡（動脈と静脈）や経穴（つぼ）を書き込む人体模型で、江戸中期から紙や木で作られ、漢方医学に利用されました。医学部史料室に所蔵する人形は、経絡が記入されていないもので大変珍しく、多くの来館者の関心を集めていました。

就学前の子どもから年配の方まで、様々な方が来館し、難しい解剖図をわかりやすく展示してあると好評を得ました。

第50回博物館コンサートを開催

●博物館

博物館は、4月27日(土)、同館展示室において、やまのて音楽祭との共催で、第50回博物館コンサート「爽やかな風にのせて～ミュージックベルの調べ」を開催しました。

今回は、6人組のミュージックベルグループ Sonnette (ソネット) によって、1時間にわたって全14曲が演奏されました。演奏楽器のミュージックベルは、良く知られて

いるハンドベルを参考として日本で開発された楽器で、1人で40個以上のベルを扱います。同館で開催されている特別展「くじら クジラ 鯨」に合わせて海にちなんだ「Under The Sea」という曲等を演奏したり、途中でパートごとの演奏をして曲名を当てるクイズコーナーを催したりするなどし、コンサートは聴衆をひきこみながら進行されました。

また今回は、平成13年に初めて同コンサートが開かれてから、ちょうど50回目を迎えました。その間、地域の方にも愛され、聴衆も最初の数十人から近年は毎回200名を超えるようになりました。さらに、名古屋大学地域貢献特別支援事業からの助成も受けるようになり、同コンサートを途切れることなく開催することができています。

51回目となる次回は、9月11日(水)14時よりハープとヴィオラによるデュオコンサートを開催する予定です。



演奏の様子

「地質の日」特別講演会を開催

●博物館

博物館は、5月10日(金)、同館講義室において、「地質の日」特別講演会を開催しました。

「地質の日」は、明治9年5月10日に広域的な日本の地質図が初めて作成、公開されたことを記念して、地質関係の組織・学会が発起人となって、平成20年に同日を「地質の日」と定めたもので、一般の人々が地質をより身近に感



講演の様子

じ理解することによって、安全・安心で豊かな暮らしを確保するとともに、地球や環境を大切にすることにもつなげることを目的としています。

講演は、日本の地質や地質図に詳しい斎藤 眞独立行政法人産業技術総合研究所地質情報研究部門シームレス地質情報研究グループ長を招き、「日本の地質の読み方・使い方－地球をよく知って上手に付き合うための基本情報－」と題して行われました。

斎藤グループ長は、地質図とは何か、地質図はどうやって作成されるのか、地質図から何が読み取れるのかなどについて説明し、その後、日本の地質が地球のプレートの構造運動とどのように関係しているのかをわかりやすく解説しました。また、地質図などの情報発信のための工夫として、地質図の電子情報化のみならず、科学的に見て特に重要な地質遺産を複数含む自然公園である「ジオパーク」の設立構想など地域貢献についても紹介し、多くの方々からの質問が寄せられ、非常に好評でした。

ワークショップ「くじらのひげで靴べらを作ろう」を開催

●博物館

博物館は、5月11日(土)、同館講義室において、ワークショップ「くじらのひげで靴べらを作ろう」を開催しました。

これは、同館で3月25日(月)から7月20日(土)まで開催されている第17回特別展「くじら クジラ 鯨」の関連企画として開催されたものです。同展では、平成21年に名古屋

屋港に流れついたマッコウクジラの死体から4年間かけて作った全身骨格標本をはじめ、クジラに関わるさまざまな資料を展示しています。

ワークショップは、親子連れを中心に60名が参加し、参加者多数のため2回に分けて開催しました。参加者はまず、講師の内田昌宏氏から、日本近海にはいろいろな種類のクジラが生息していること、クジラには歯を持つハクジラの仲間とひげを持つヒゲクジラの仲間がいること、かつてはクジラのひげを使ったいろいろな製品が作られていたことなどの説明を聞き、ひげ製の靴べらの製作工程を学びました。次に、靴べらの原材となる型抜き・加熱成型したナガスクジラのひげを手にとって、蠟を使って磨き、孔を開けてひもを通しました。

クジラのひげ製の靴べらは、現在は生産量が少ないため、目にする機会もほとんどなくなった貴重なものです。参加者は、初めて見るひげ製の靴べらの色や艶に感心したり、熱心なあまりに蠟をたくさん塗りすぎ、その対処法を内田氏に尋ねたりしていました。

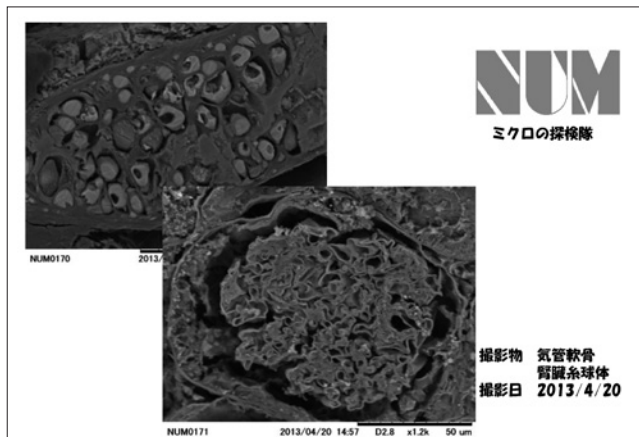
また、靴べら製作と併せて紙粘土で自分の好きなクジラを作り、色を塗って仕上げました。



説明を受ける様子

ミクロの探検隊を開催

●博物館



参加者が撮影・制作したポストカード

博物館は、4月20日(土)、ミクロの探検隊「ホニユウ類の組織を電子顕微鏡でみよう」を開催しました。同企画は、同館が平成19年から行っている電子顕微鏡を使用した体験型次世代教育で、小学5、6年生と中学生及び高校生を中心として、毎回20名が抽選で選ばれ参加しています。

今回はまず、玉ねぎの表皮を使って標本を作成し、それを観察することで、生物顕微鏡の使い方を学習しました。次に、ラットの主な臓器組織の標本を生物顕微鏡で観察し、各組織の構造や働きの説明を受けました。さらに走査型電子顕微鏡を使用して小腸、腎臓、気管等を観察し、撮影しました。同じラットでも、臓器によって組織・細胞の構造も全く違い、機能的に分化していることを学びました。また自ら電子顕微鏡を操作して撮影した写真をポストカードとして印刷しました。なお、同企画は大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター分析機器部門及び日立テクノロジーズの協力を得て開催されました。

野外観察園春の見学会を開催

●博物館



見学会の様子

博物館は、5月11日(土)、野外観察園において、春の見学会を開催しました。

同見学会は10年近く行われていますが、今回は珍しく強い雨に見舞われ、25名の参加者は、傘を片手に観察園の東側を見学しました。

今回のテーマは植物の分布で、東海丘陵要素、石灰岩植物などの実物を見ながら分布の説明を聞きました。雨が強かったので、後半はセミナーハウスに入り、スライドを使った講義を受けました。その後希望者は、博物館で、観察園の植物を走査型電子顕微鏡で観察しました。

参加者たちは、植物には気候や土壌だけでは説明できない分布をするものがあることなどを知り、分布の面白さについて熱心に耳を傾けていました。また、電子顕微鏡で観察できる精巧な植物の構造も楽しみました。

次回は11月16日(土)13時から開催する予定です。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
1 新美輝幸生命農学研究科助教などは昆虫に隠された羽があることを突き止めた	4.16 (火)	日経 (朝刊)
2 現代日本誤百科 (785) : 「予定は未定」町田 健文学研究科教授	4.16 (火)	中日 (朝刊)
3 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は教育委員会の首長権限強化について「選挙を意識して成果が求められる首長の権限が強まると、政策が大きく揺れかねない」と語る	4.16 (火)	朝日 (朝刊)
4 本学はiPS細胞を使った難病の治療法について先天性筋無力症候群が研究対象であると取り上げられる	4.16 (火)	日経 (朝刊)
5 第31回愛知学生サッカー選手権大会 予選トーナメント2回戦:14日 医学部サッカー部が0-2で愛知教育大学に敗れる	4.16 (火)	読売
6 山岡耕春環境学研究科教授は16日にイラン南東部で起きたM7.8の地震について「マグニチュードと現地の建物の耐震性を考えると、震源から100キロを越える広い範囲で被害が出ていると思われる」と語る	4.17 (水)	朝日 (朝刊)
7 本学は米国トムソン・ロイターが発表した「論文の引用動向からみる日本の研究機関ランキング (2013年版)」で国内順位が7位、世界順位は133位に入った	4.17 (水)	日刊工業 日経 (朝刊)
8 益川敏英本学特別教授、山脇幸一素粒子宇宙起源研究機構特任教授、青木保道基礎理論研究センター准教授らのグループがヒッグス粒子は複数の未知の粒子が結合した「複合粒子」の可能性があることを突き止めた	4.18 (木)	朝日 (朝刊)
9 現代日本誤百科 (787) : 人気を「一手に集める」町田 健文学研究科教授	4.18 (木)	中日 (朝刊)
10 東日本大震災から2年 これからの防災を考えるシンポジウム開催:3月11日 武村雅之減災連携研究センター寄附研究部門教授、廣井 悠同准教授が講演	4.18 (木)	日経 (朝刊)
11 平成25年度第1回地球教室-親子対象フィールドセミナー「博物館バックヤードと野外で深海の地層と化石を調べよう!」開催:5月25、26日 名古屋市科学館との共催	4.18 (木)	読売
12 濱口総長の入学式の式辞が取り上げられる	4.18 (木) 4.20 (土)	朝日 (夕刊) 中日 (朝刊)
13 上出洋介本学名誉教授が今年は太陽活動が最も活発になる時期であるが、例年より低調だという予測を発表	4.19 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
14 THE 1ST INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON TRANSFORMATIVE BIO-MOLECULES (ISTBM-1) 開催:18、19日	4.20 (土)	中日 (朝刊)
15 本学と京都外国語大学、エルサルバドル共和国文化庁の合同調査チームはエルサルバドル共和国の古代都市遺跡チャルチュアパ遺跡群で「ジャガーヘッド」と呼ばれる神獣の石像2つを完全な状態で発見	4.21 (日)	日経 (朝刊)
16 タイムスリップ:赤崎 勇本学特別教授の青色発光ダイオードの研究が取り上げられる	4.22 (月)	朝日 (朝刊)
17 現代日本誤百科 (788) : 「その揚げ句の果てに」町田 健文学研究科教授	4.22 (月)	中日 (朝刊)
18 数理ウェブ開催:27日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「代数的な集合と解析的な集合」と題して講演	4.22 (月)	中日 (朝刊)
19 新美輝幸生命農学研究科助教はカブトムシの性差を抑えると雄雌中間型の角が作られることを突き止めた	4.23 (火)	朝日 (朝刊) 他4社
20 現代日本誤百科 (789) : 「不必要な項目は割愛」する 町田 健文学研究科教授	4.23 (火)	中日 (朝刊)
21 榊プロデュース第26弾プレステージレクチャーズ「創造性の源は知的好奇心」開催:25日 益川敏英本学特別教授が豊橋技術科学大学長榊 佳之氏との対談形式で講演	4.23 (火)	日刊工業
22 本学などの参加を見込みSPring 8ユーザー協同体が独自の教育プログラム「Spring 8大学院連合」を2014年度にも開始	4.23 (火)	日刊工業
23 増田公明太陽地球環境研究所准教授などは屋久杉の年輪を解析し993年頃地球に到達した宇宙線が急増したことを突き止めた	4.24 (水)	中日 (朝刊) 他2社
24 グリーンモビリティ連携研究センターや名古屋工業大学など自動車関連技術のノウハウ等を一覧できるウェブサイトを名古屋産業科学研究所が開設	4.24 (水)	日刊工業
25 現代日本誤百科 (790) : 「おいしさも長持ちできる」町田 健文学研究科教授	4.24 (水)	中日 (朝刊)
26 名古屋市生涯推進学習センター 大学連携キャンパス講座「達人 (研究者) と話そう光 (火) を使う、光で観る」開催:5月18日、6月1、15、22、29日	4.24 (水) 5.1 (水)	読売 中日 (朝刊)
27 水野正明医学部附属病院教授と堀 勝工学研究科教授などはプラズマを照射した培養液が脳腫瘍培養細胞や卵巣がん培養細胞と正常な細胞を選んで殺傷できることを突き止めた	4.24 (水)	日経産業
28 本学と京都大学の研究グループがiPS細胞から効率よく骨格筋細胞を作製し筋ジストロフィーの病態の再現に成功	4.24 (水) 4.25 (木)	中日 (夕刊) 中日 (朝刊)
29 本学は産学官連携強化のため、共同研究を希望する企業が経費を負担すれば企業の研究者を特任教員として迎え入れ、学内の設備などを利用できる仕組みを立ち上げた	4.25 (木)	朝日 (朝刊) 読売
30 仏教美術・文化に親しむ会講座「平山郁夫 悠久のシルクロード展に寄せて」開催:5月26日 講師 宮治 昭本学名誉教授	4.25 (木)	中日 (朝刊)
31 時流の先へ 中部財界ものがたり:第6部 陶磁器を世界へ (番外編) 日本ガイシ株式会社相談役柴田昌治氏本学卒業生	4.25 (木)	中日 (朝刊)
32 水野幸治工学研究科教授は子どものシートベルト着用について「シートベルトが体格に合っていないと、衝突時に肩ベルトが首を絞めるだけでなく、腰ベルトが腹部にかかって内臓を圧迫する可能性が高い」と語る	4.27 (土)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
33 あいち賢人：地震、津波学の先駆者 故飯田淑事本学名誉教授	4.27 (土)	中日 (朝刊)
34 西村翔平さん本学4年生は代表を務める「NAGOYA 学生キャンパス『ナゴ校』」の活動について「様々な学校や学部の人と交流することで人間の幅を広げられる」と語る	4.28 (日)	朝日 (朝刊)
35 平成25年春の褒章 紫綬褒章：河本邦仁工学研究科教授	4.28 (日)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
36 本 秀紀法学研究科教授は「1952年4月28日を『主権回復の日』」ととらえるのは、一面的な見方だ」と語る	4.29 (月)	朝日 (朝刊)
37 平成25年春の叙勲 瑞宝中綬章：杉山達夫本学名誉教授、星野 洸同名誉教授	4.29 (月)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
38 未来を拓く大学26：名古屋経済大学長佐々木雄太本学名誉教授	4.29 (月)	読売
39 渡辺理事と荘司長三理学研究科准教授などは酵素使ってベンゼンからつくる新しいフェノールの合成法を開発	4.30 (火) 5. 1 (水)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
40 福井康雄理学研究科教授や町田泰則同特任教授など本学の教授が名古屋市千種区「うなぎ有本」で2ヶ月に1度講演を行っている	4.30 (火)	朝日 (朝刊)
41 いまドキッ！大学生：カルトの勧誘 本学学生の体験が取り上げられる	4.30 (火)	中日 (朝刊)
42 司法制度改革 曲がり角：2012年司法試験 法科大学院別結果で本学が取り上げられる	4.30 (火)	日経 (朝刊)
43 小田洋一理学研究科教授は自然科学研究機構生理学研究所が発表した研究成果について「リズム運動を制御する神経回路の実態が分かったことは非常に大きな進歩」と語る	5. 1 (水)	読売
44 博物館「地質の日」関連イベント 特別講演会「日本の地質の読み方・使い方ー地球をよく知って上手に付き合うための基本情報」開催：10日	5. 1 (水)	読売
45 森松工業株式会社取締役海外事業部長西村今日子氏本学卒業生が上海からグローバル展開している自社の事業について語る	5. 2 (木)	毎日 (朝刊)
46 本学が産学連携開発拠点「少子高齢化社会に向けた情報モビリティ・イノベーション」を新設	5. 3 (金)	日刊工業
47 本 秀紀法学研究科教授が非常勤で教壇に立つ愛知県立大学の「日本国憲法」の授業が紹介される	5. 3 (金)	朝日 (朝刊)
48 第66回中日文化賞 松本邦弘理学研究科教授、小澤正直情報科学研究科教授	5. 3 (金)	中日 (朝刊)
49 第31回愛知学生サッカー選手権大会 決勝トーナメント1回戦 サッカー部が2-0で名城大学に勝利	5. 3 (金)	読売
50 国立天文台教授故森田耕一郎氏本学卒業生の名前をアルマ望遠鏡のアンテナ群の一部に冠し「モリタアレイ」とすることで国際チームが合意	5. 3 (金) 5. 9 (木)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
51 病院の実力：神経難病 渡邊宏久医学部附属病院講師がパーキンソン病について解説	5. 5 (日)	読売
52 第31回愛知学生サッカー選手権大会 決勝トーナメント2回戦 サッカー部が2-1で愛知淑徳大学に勝利	5. 5 (日)	読売
53 日本経済新聞電子版「経営者ブログ」執筆者と語るタペ開催：22日 前駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が講演	5. 5 (日)	日経 (朝刊)
54 書籍：「漂うモダニズム」槇 文彦本学名誉博士著	5. 5 (日)	朝日 (朝刊)
55 スキャナー：インフラ劣化 想定せず 中村 光工学研究科教授は老朽化した橋などについて「負荷試験」だけでなく、検査対象からサンプルを抽出し「破壊試験」で強度を確認する手法の導入を提言	5. 6 (月)	読売
56 現代日本誤百科 (795)：「予約の可否」を問い合わせる 町田 健文学研究科教授	5. 6 (月)	中日 (朝刊)
57 第31回愛知学生サッカー選手権大会 決勝トーナメント準決勝 サッカー部が2-3で愛知学院大学に敗れる	5. 6 (月)	読売
58 ナビゲーター：トヨタ自動車株式会社副会長内山田竹志氏本学卒業生	5. 6 (月)	日刊工業
59 書籍：「青い光に魅せられて」赤崎 勇本学特別教授著	5. 8 (水)	中日 (朝刊)
60 現代日本誤百科 (796)：「参加費は無料」町田 健文学研究科教授	5. 8 (水)	中日 (朝刊)
61 第12回ヒメボタルサミット in 愛知開催：26日 別所 学さん生命農学研究科大学院生が講演	5. 8 (水)	読売
62 第31回愛知学生サッカー選手権大会ベストイレブン DF 井出雅人さん本学学生	5. 8 (水)	読売
63 本学が村上春樹著「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」に登場していると紹介される	5. 8 (水) 5.14 (火)	読売 中日 (朝刊)
64 現代日本誤百科 (797)：「散らかし癖がリバウンド」する 町田 健文学研究科教授	5. 9 (木)	中日 (朝刊)
65 共同国際シンポジウム「朴槿恵・習近平・安倍晋三政権の時代における3国の協力は？」開催：6日 元駐中国大使丹羽宇一郎氏本学卒業生が基調報告	5. 9 (木)	朝日 (朝刊)
66 福和伸夫減災連携研究センター教授が「過去に学び未来の南海トラフ巨大地震に克つ」と題して講演	5.10 (金)	朝日 (朝刊)
67 リンカーンと憲法改正 愛敬浩二法学研究科教授	5.12 (日)	中日 (朝刊)
68 現代日本誤百科 (798)：「波乱の展開が巻き起こる」町田 健文学研究科教授	5.13 (月)	中日 (朝刊)
69 研究現場発：再生医療実用化へ道筋 加藤竜司創薬科学研究科准教授	5.13 (月)	中部経済新聞
70 紙つぶて：真つ当な研究評価を 野依良治本学特別教授	5.13 (月)	中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
71 東山哲也トランスフォーマティブ生命分子研究所教授と丸山大輔日本学術振興会特別研究員（受入れ先：トランスフォーマティブ生命分子研究所）は被子植物が複数の花粉とは受精しないしくみを解明	5.14（火）	中日（朝刊）
72 医学部附属病院など災害拠点病院を中心に愛知県内6病院が災害時に電子カルテを相互に共有できるネットワークの運用を開始	5.14（火）	中日（朝刊）
73 現代日本誤百科（799）：「破格に面白い」町田 健文学研究科教授	5.14（火）	中日（朝刊）
74 日本 ALS 協会愛知県支部総会開催 :19日 祖父江 元医学系研究科教授が講演	5.14（火）	中日（朝刊）
75 春名幹男国際言語文化研究科客員教授は米国司法当局が AP 通信の記者らの電話通話記録を押収したことについて「リベラルなイメージが強いオバマ大統領だが、情報漏えいには非常に厳しい態度を示している」と語る	5.15（水）	読売
76 本学で愛知県立芸術大学の演奏家がクラシック音楽の魅力を伝える講義「レクチャーコンサート」が始まり足立 守 PhD 登龍門推進室特任教授は「学問でアイデアを生み出すには芸術が関係している」と語る	5.15（水）	中日（夕刊）

平成25年度名古屋大学公開講座

■全学企画

テーマ：絆：つなぐ、つながるを考える

開催日時：平成25年8月20日(火)～10月15日(火)の火・木曜日の全15回
午後6時～午後7時30分

会場：経済学部第1及び第2講義室

募集定員：200名

応募資格：満18歳以上の方

受講料：9,200円

申込期間：平成25年6月3日(月)～7月22日(月)

ホームページ：<http://www.nagoya-u.ac.jp/international/lecture/open-lecture/>

申し込み・問合わせ先：研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL：052-789-5969



日程	テーマ	講師
8/20	つなぐ、つながる：ゴシック美術を考える	文学研究科 木俣 元一 教授
8/22	地域をつなぐインフラを次世代へ引き継ぐために	工学研究科 中村 光 教授
8/27	児童虐待への対応と法の役割—家族への介入と支援のあいだ—	法学研究科 原田 綾子 准教授
8/29	人と海のつながり：人・水循環・海洋生態系	地球水循環研究センター 石坂 丞二 教授
9/3	情報通信技術 (ICT) でつなぐコミュニティー	情報科学研究科 安田 孝美 教授
9/12	対人ネットワークのつながりが生み出すパワー	教育発達科学研究科 五十嵐 祐 准教授
9/17	健康、疾患の基礎としての免疫系	医学系研究科 磯部 健一 教授
9/19	企業組織における人々のつながり—歴史、現在地点、展望	経済学研究科 江夏幾多郎 准教授
9/24	テレビは21世紀に「きずな」として生き残れるか	国際言語文化研究科 河村 雅隆 教授
9/26	「音」を介したつながり：ヒトの音声言語からムシの求愛歌まで	理学研究科 上川内あづさ 教授
10/1	食料がつなぐ世界と日本・都会と農村	生命農学研究科 生源寺眞一 教授
10/3	放射能除染に活かされる宇宙放射線観測技術	太陽地球環境研究所 田島 宏康 教授
10/8	結び目の数学—「こんな研究」の意外なつながり—	多元数理科学研究科 川村 友美 准教授
10/10	未来へつなぐ民俗的思考—震災を経て一人の民俗学者が考えたこと—	国際開発研究科 櫻井 龍彦 教授
10/15	地域公共交通がつなぐ人、まち、そして未来	環境学研究科 加藤 博和 准教授

■ラジオ公開講座

テーマ：絆：つなぐ、つながるを考える

開催期間：平成25年7月7日(日)～9月8日(日) 毎週日曜日午前11時～午前11時30分

放送局：東海ラジオ放送 (1332KHz)

問合わせ先：研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL：052-789-5969

日程	テーマ	講師
7/7	テレビは21世紀に「きずな」として生き残れるか	国際言語文化研究科 河村 雅隆 教授
7/14	変化が求められる情報セキュリティ対策	情報基盤センター 高倉 弘喜 教授
7/21	地域をつなぐインフラを次世代へ引き継ぐために	工学研究科 中村 光 教授
7/28	対人ネットワークのつながりが生み出すパワー	教育発達科学研究科 五十嵐 祐 准教授
8/4	健康、疾患の基礎としての免疫系	医学系研究科 磯部 健一 教授
8/11	人と海のつながり：人・水循環・海洋生態系	地球水循環研究センター 石坂 丞二 教授
8/18	放射能除染に活かされる宇宙放射線観測技術	太陽地球環境研究所 田島 宏康 教授
8/25	地域公共交通がつなぐ人、まち、そして未来	環境学研究科 加藤 博和 准教授
9/1	企業組織における人々のつながり—歴史、現在地点、展望	経済学研究科 江夏幾多郎 准教授
9/8	食料がつなぐ世界と日本・都会と農村	生命農学研究科 生源寺眞一 教授

■部局企画

日程	講座名等	会場	定員	受講料	問い合わせ先
第1回：6/5(水) 第2回：8/8(木) 第3回：12/15(日) 13:00~17:00(予定)	市民参加アベニュー 「聞いてみよう、見てみよう！ あなたの周りの電気と暮らし」	第1回：メガソーラーたけとよ 第2回：名古屋大学 第3回：名古屋大学	各回100名程度	無料	エコトピア科学研究所 エネルギーシステム寄附研究部門 小島寛樹 TEL：052-789-5874 h-kojima@esi.nagoya-u.ac.jp
7/27(土) 13:00~16:00	第12回 Jr. サイエンス教室	理学部 G 館 1 階生物実習室 (113号室)	20名	無料	Jr. サイエンス教室担当係 jr-sci@gene.nagoya-u.ac.jp
8/3(土)~8/4(日) 10:00~16:00	公開実験講座2013 「バイオサイエンス・バイオ テクノロジーを体験する」	生物機能開発利用研究センター及び 理農館の各研究室	15名 ※高校生以上 ※2日間出席可能 な方	2,500円	生物機能開発利用研究センター 公開実験講座2013係 ホームページ： http://bbc.agr.nagoya-u.ac.jp TEL：052-789-5838 (9:00~16:00) 又は、 TEL：052-789-5194 (月・水・金 10:00~17:00)
8/5(月) 9:30~16:30	第1期高大連携・ものづくり 公開講座 (第9回)	工学研究科創造工学センター (IB 電子情報館北棟10階)	10名程度 (高校生)	400円 (予定)	工学研究科創造工学センター 「高大連携・ものづくり公開講座」 TEL：052-789-3788
平成26年3月24日(月) 9:30~16:30	第2期高大連携・ものづくり 公開講座 (第10回)	工学研究科創造工学センター (IB 電子情報館北棟10階)	10名程度 (高校生)	400円 (予定)	mono@cplaza.engg.nagoya-u.ac.jp
8/6(火)~8/8(木)及び 8/26(月) 9:30~17:00	数学アゴラ (夏季集中コース)	多元数理科学研究科 多元数理科学棟 509号室	約100名	無料	愛知県立高校以外の人 多元数理科学研究科 教育研究支援室数学アゴラ係 TEL：052-789-5994
10/26(土)、11/9(土)、 11/16(土) 9:30~17:00	秋の公開講座		約100名	無料	愛知県立高校の生徒 愛知県「知の探究講座」 TEL：052-954-6786
8/19(月)~8/21(水) 10:00~17:00	第22回公開セミナー 「天文学の最前線」 ~新時代の技術で挑む宇宙の謎~	19日：名古屋大学坂田・平田ホール (理学南館) 20日：名古屋科学館サイエンスホール、 プラネタリウムドーム(プラザアース) 21日：名古屋大学野依記念学術交流館	300名 ※高校生以上 (高 校生・大学生・ 教員優先。研究 室見学は定員 100名)	資料代 500円 (高大生)、 1,000円 (一般)	理学研究科 Uir 研「公開セミナー」係 (月・火・木・金 9:30~15:30) TEL：052-788-6188
8/23(金) 9:15~16:00	発達障害児のライフサイクル 支援セミナー 「発達障害児に対する将来を 見すえた支援~幼児期から 成人期に向けて~」	豊田講堂等	500名	無料	発達心理精神科学教育研究センター 発達障害分野における治療教育的支援事業 FAX：052-747-6522 hattatsushien@educa.nagoya-u.ac.jp
8/24(土) 10:30~17:30	文系のための共分散構造解析入門： 外国語教育・応用言語学における 研究への応用を中心に	国際開発研究科棟	15名	無料	文系総務課総務グループ 川原弘美 TEL：052-789-4952
9、10月の土曜日 (3回程度) 14:00~16:00	柔道寝技教室	第4体育館	30名程度	500円 (保険代)	瓜谷章 (柔道部部长) TEL：052-789-3797
平成25年9月 ~26年3月の土曜日 (10回程度) 10:00~12:00	オープンカレッジ 自由奔放サイエンス	経済学部カンファレンスホール	300名	無料	経済学研究科エクステンション・サービス TEL：052-783-8900 FAX：052-783-8905 (キタン会) ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp
9/27(金) 13:00~14:30	先端技術公開セミナー	IB 電子情報館中棟015講義室	100名	無料	情報科学研究科 広報渉外委員会 庶務掛 TEL：052-789-4716 gsis@is.nagoya-u.ac.jp
9/27(金) 15:00~17:30	基盤研究公開セミナー 「論理~哲学と情報科学の狭間で」		100名	無料	
9/28(土) 13:00~16:00	橋守講座 一地域における橋の番人	N ² U-BRIDGE 工学部 3号館講義室	30名	無料	社会基盤工学専攻橋梁長寿命化推進室 TEL：052-789-5690 hikaru@nagoya-u.jp
10/4(金)、10/18(金)、 10/25(金) 18:30~20:00	戦争と平和の国際協力	国際開発研究科 8階オーデトリウム	80名	無料	文系総務課総務グループ 川原弘美 TEL：052-789-4952
10/19(土) 13:00~16:30	市民公開講座2013	野依記念学術交流館	150名	無料	環境医学研究所・ゲノム動態制御分野 TEL：052-789-3871
11/23(土・祝) 13:30~16:15	平成25年度鶴舞公開講座 「いつまでも健康で快適な生活を 送る秘訣」	医学部附属病院 中央診療棟 3階講堂	200名	無料	医学部・医学系研究科総務課総務掛 TEL：052-744-2040 FAX：052-744-2785 iga-sous@post.jimu.nagoya-u.ac.jp
12月第2週 13:00~17:00	遺伝子実験施設 第13回公開セミナー	名古屋大学内を予定	参加自由	無料	遺伝子解析分野 杉田 護 sugita@gene.nagoya-u.ac.jp

※各公開講座については、<http://www.nagoya-u.ac.jp/international/lecture/open-lecture/> に最新情報を掲載しています。

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月25日(月)～7月20日(土)

場 所：博物館 2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第17回博物館特別展

「くじら クジラ 鯨—骨からわかるからだの秘密
そして人とのかかわり—」

内 容：2009年に名古屋港に漂着したマッコウクジラの骨格標本と制作過程の写真や映像、江戸時代の捕鯨で使われた道具の展示



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

5月21日(火)～9月13日(金)

場 所：附属図書館医学部分館

2階入口ホール

時 間：9:00～20:00 (平日)

(8/8～9/13の平日は9:00～17:00)、

13:00～17:00 (土曜日)

休 館 日：日・祝日、

8月15日、16日、26日～30日、

8月10～9月7日の土曜日

入 場 料：無料

附属図書館医学部分館 第4回ミニ展示会

「珍品・逸品・新収品—医学部史料室の最近の
収藏品から—」



[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

6月18日(火)、7月19日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール

時 間：18:00～19:30

定 員：120名

対 象：一般

参 加 費：無料

防災アカデミー

[第91回]

講演題目：「防災機関としてのテレビの役割」

講 演 者：桶田 敦氏 (TBS テレビ情報制作局次長)

内 容：メディア関連

[第92回]

講演題目：「聴こえない音を聴く—気圧を測ると津波も分かる?—」

講 演 者：新井伸夫氏 (日本気象協会参与)

内 容：災害と気象



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

6月19日(水)

場 所：文系総合館 3階306演習室

時 間：16:00～18:00

定 員：30名

対 象：本学および近隣の大学関係者

参 加 費：無料

高等教育研究センター

第116回招へいセミナー

講演題目：「専門学校生の職業世界への接近・参入過程の検討」

講 演 者：植上一希氏 (福岡大学准教授)

内 容：専門学校生の学びについて、特に彼らの職業世界への接近・参入過程に着目する視点から、その実態と意義・課題を論じる



[問い合わせ先]

高等教育研究センター

教授 夏目達也 052-789-5696

6月22日(土)、6月29日(土)

場 所：博物館 3階講義室

時 間：10:30～12:00

定 員：80名

(基本的に毎回参加できる人)

対 象：一般

参 加 費：無料

名古屋市生涯学習推進センター

大学連携キャンパス講座

「達人(研究者)と話そう—光(火)を使う、光で観る—」

講演題目：「松明からLEDまで」(6/22)

講 演 者：澤木直彦 (本学名誉教授)

講演題目：「光と分子の共同作業」(6/29)

講 演 者：富岡秀雄氏 (三重大学名誉教授)



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

6月22日(土)、7月6日(土)

場 所：インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間：10:00~15:00

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター 平成25年度前期 B人セミナー

テ ー マ：「なぜ、あの人は惚れ惚れするほど、コミュニケーション上手なのか？」(6/22)
「製造業における、知財戦略と知財部門の業務内容」
「再生医療の現状と今後の展望」(7/6)

6月24日(月)

場 所：ES 総合館1階 ES 会議室

時 間：13:00~17:00

定 員：70名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

地球水循環研究センター

寄附研究部門教授 安田公昭

052-747-6708

地球水循環研究センター第1回ステークホルダー マネジメント学シンポジウム

テ ー マ：「洋上風力発電とステークホルダーマネジメント」

講演題目：「洋上風力と気象学のかかわりについて」

講 演 者：上田 博（地球水循環研究センター教授）

講演題目：「陸上風力発電の地域的受容」

講 演 者：本巢芽美（同寄附研究部門助教）

講演題目：「洋上風力とステークホルダーマネジメント論」

講 演 者：安田公昭（同寄附研究部門教授）



6月25日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室

時 間：13:00~14:30

定 員：40名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

平成25年度第3回情報連携統括本部

公開講演会・研究会

講演題目：「成功のための習慣獲得術」

講 演 者：山上俊彦氏（株式会社 ACCESS シニアスペシャリスト）

6月29日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：14:00~

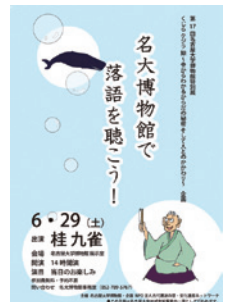
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館落語会「名大博物館で落語を聴こう！」

出 演：桂 九雀氏（落語家）



6月29日(土)

場 所：全学教育棟北館4階
多目的講義室（406号室）

時 間：13:40~17:30

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

国際言語文化研究科 准教授 渡辺美樹

miki@lang.nagoya-u.ac.jp

国際言語文化研究科

異文化コミュニケーションレッスン

講演題目：「『War Horse』—原作・舞台劇・映画」

講 演 者：玉崎紀子氏（中京大学名誉教授）

講演題目：「『E.T.』の中の児童文学」

講 演 者：山口 均氏（愛知学院大学教授）

講演題目：「『弱いロボット』の誕生—弱さが引き出すコミュニケーション
について考える」

講 演 者：岡田美智男氏（豊橋技術科学大学教授）



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月1日(月)

場 所：国際開発研究科 8階
多目的オーデトリウム
時 間：15:00~17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
文学研究科附属
「アジアの中の日本文化」研究センター
教授 坪井秀人
tsuboi@lit.nagoya-u.ac.jp

文学研究科附属「アジアの中の日本文化」
研究センター セミナー・シリーズ
「東アジア関係学に向けて」第2回
講演と朗読・トークの会

講演題目：「二つの言語の狭間に」
講演者：田原氏（城西国際大学客員教授）



7月3日(水)

場 所：カフェフロンテ
時 間：18:00~19:30
定 員：50名
対 象：一般
参 加 費：無料

(会場にてドリンク等の注文が必要)

[問い合わせ先]
減災連携研究センター 052-789-3468

第26回げんさいカフェー Gen Science Café

テ ー マ：「研究者と市民とが対話するサイエンスカフェ」
講演者：中井健太郎（工学研究科准教授）

7月6日(土)

場 所：文系総合館 6、7階
時 間：13:00~15:30
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
文系総務課
国際言語文化研究科入試担当
052-789-4881

**国際言語文化研究科
2013年度オープンキャンパス**

内 容：講座・コース紹介、進学相談会、
大学院生によるポスター発表・インフォメーションコーナー



7月12日(金)

場 所：ES 総合館 1階 ES ホール
時 間：13:00~17:30
定 員：200名
対 象：学生、研究者、技術者、
防災行政担当者、
企業防災担当者、他
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
減災連携研究センター 052-789-3468

**減災連携研究センター
社会連携推進会議・シンポジウム (仮称)**

内 容：活動報告、パネルディスカッション

7月13日(土)

場 所：国際開発研究科棟
時 間：10:00~16:00
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
国際開発研究科
教授 川島富士雄 052-789-4974

**国際開発研究科
オープンキャンパス2013**

内 容：全体説明会、専攻別説明会、施設見学、コーパスに関する講演、他

7月25日(木)、26日(金)、29日(月)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：9:45~16:00
対 象：参加校の高校生
参 加 費：無料

[問い合わせ先]
減災連携研究センター 052-789-3468

高校生防災セミナー

内 容：愛知県内の高校生を対象とした防災人材育成のためのセミナー

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月27日(土)～8月24日(土)

場 所：豊田講堂、他

時 間：9:15～17:00

定 員：500名

参 加 費：3,000円(企業防災コース除く、
オプション追加あり)

防災・減災カレッジ

講 演 者：福和伸夫(減災連携研究センター教授)、

山岡耕春(環境学研究科附属地震火山・防災研究センター 教授)、

栗田暢之氏(特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事)、他

内 容：防災概論、自然災害概論などの防災基礎研修

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

8月2日(金)

場 所：齋藤永宏研究室

(グリーンビークル材料研究施設
3階305室)、他

時 間：10:00～16:15

定 員：20名

対 象：小学5年生、6年生

(可能であれば保護者同伴)

参 加 費：無料

日本学術振興会連携事業

ひらめき☆ときめきサイエンス

～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

テ ー マ：「生物の『すごい』を顕微鏡でのぞいてみよう

ー水がコロコロころがる表面ー

内 容：特殊な顕微鏡でハスの葉の表面を観察し、生物の「すごい」の
源について一緒に考える

[問い合わせ先]

グリーンモビリティ連携研究センター

助教 上野智永 052-789-5163



8月20日(火)～10月15日(火)

(期間内の火・木曜日)

場 所：経済学部1階第1、第2講義室

時 間：18:00～19:30

定 員：200名

対 象：一般

参 加 費：9,200円(全15回)

平成25年度名古屋大学公開講座

テ ー マ：「絆：つなぐ、つながるを考える」

[問い合わせ先]

研究協力部社会連携課 052-789-5969



10月1日(火)～11月2日(土)

場 所：博物館2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

博物館トライボロジー遺産記念展示

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



名大トピックス No.241 平成25年6月14日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町(〒464-8601)

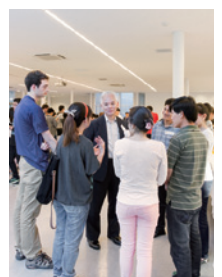
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>)でもご覧いただけます。

表紙

春季新入留学生懇談会で
懇談する総長と留学生
(平成25年5月20日)



134 学部の誕生と草創期⑦ — 工学部 —

名古屋大学工学部は、当初名古屋帝国大学理工学部として設置されました。名帝大が1939(昭和14)年に創立された時、すでに理工学部の設置は決定していましたが、実際に学部が開設されたのは1940年度からです。医学部と異なり母体となる学校がなく、しかるべき教員の確保や施設の用意に時間がかかるためでした。

それを戦時体制下においておこなうという難事業は、瀧澤元治総長(元東京帝国大学工学部長)を通じて、東京帝国大学およびその関係者の協力を得ながら進められました。理工学部創設顧問には、本多光太郎や長岡半太郎といったそうそうたる顔ぶれが並んでいます。校舎は、暫定的な措置として、名古屋市東区西二葉町の愛知県第一中学校(現在の旭丘高校の前身)の旧校舎を、増改築をおこなって使用しましたが、一部は整備が始まった東山地区へ移りました。

1942年度には理学部が分離独立し、工学部と改称されま

した。当初の学科構成は、機械学科(1学年定員60名)、電気学科(40名)、応用化学科(40名)、金属学科(40名)、航空学科(20名、のち30名)でした。ただ、東京帝国大学が第二工学部を設置するなど、戦時体制の要請により全国の大学で工学系の定員が増やされた影響で、今では考えられないことですが、定員を満たすのがなかなか難しい状況でした。

そして1945年5月の空襲では、西二葉地区が建物焼失率約75%という大きな被害を受けました。ただ、3月の空襲で鶴舞の医学部が空爆されたのち、工学部の各地への疎開が進み、この空襲の時にはそれがほぼ完了しており、学内での人的な犠牲はなかったようです。しかし敗戦後、当時の状況では校舎を新築することは難しく、熱田の旧陸軍高蔵工廠の建物を使用することになりました。この高蔵の工学部の東山への移転が完了するのは、ようやく1955年のことです。



1	2	3
4		5

- 1 東山地区の名古屋帝国大学工学部校舎(現在の工学部9号館のあたりから撮影か)。
- 2 「名古屋帝国大学本部仮庁舎及理工学部仮校舎配置図」(『名古屋帝国大学一覽』1940年度版より)。
- 3 理工学部電気学科第1回入学生の集合写真(1940年)。戦時体制の影響で修業期間が3年から2年半に短縮され、1942年9月に卒業した。
- 4 工学部機械学科の実験室(東山)と学生たち。
- 5 卒業と同時に海軍へ入隊した工学部第1回卒業生たち。ただし、1943年のいわゆる「学徒出陣」開始後も、名帝大の学生は卒業まで入隊を猶予されていた。